一人で一家を背負い経営に奮闘していました。その姿を見て育った私は、いつしか「税理士になって経営を助けたい」との思いを抱くようになったのです。

お世辞にも、母は経営者として優れているとはいえませんでした。助けたくても助けられない、無力な子供の私が持っていた母への複雑な感情が「経営者を助けたい」という強い心のエネルギーとなったのでしょう。

大学卒後後は、縁あって久保田鉄工（現・クボタ）に入社しました。しかし税理士への思いは断ち難く、五年で退社。実家近くの「出口会計事務所」において経験を積ませていただき、税理士としての基礎を学ばせていただきました。

出口会計事務所で税理士として経験を積ませていただき、税理士としての基礎を学ばせていただきました。

遠回りはしましたが、昭和五十九年に試験に合格することができ、私は念願の税理士としての歩み始めました。ただ、実務能力は評価されても、私にはどこか自分本位なところがあり、悩みを抱えたお客様に十分寄り添うことができず、厳しいお叱りをいただくこともありました。

出口会計事務所で税理士としての態度の反映であって、自分が変われば他人、組織が変わる、という考え方です。私は「統合思想」に触れ、「お客様や社員、家族に対してよい関係を築いていくためには、まず自分自身が変わることが必要なのだ」と、気づかされたのでした。

そして、さらに学びを深めようと、稲盛和夫氏が塾長を務めている「盛和塾」にも入塾。その勉強会のテキストとして使用されていた森信三先生の著書『修身教授録』と出逢ったことが、私のその後の人生を決定的に変えることになりました。

特に第九講「読書」を読んだ時の感激はいまなお忘れられません。「読書の人生に対する意義は、『心の食物』という言葉がもっとも当てはまる」などの森先生の教えが心にずしりと響き、頭を叩かれたような衝撃を受けたのです。また、森先生の師匠である西晋一郎先生の「人の一生は、恩の観点からいえば、ただ恩を受け、恩を返すだけである」という言葉にも震えるような感動を覚えました。

もともと儒教思想は好きではありましたが、それ以来、向学心が湧き上がり、森先生に導かれるようにして二宮尊徳や吉田松陰、西洋哲学などの思想書を貪るように読んでいきました。

その中で、『修身教授録』を主なテキストとして、私は社員たちに対して思想学習を始めることを決断しました。私たちの仕事は、一歩間違えばお客様の会社を倒産させてしまう可能性さえあるため、経営者の方との抜き差しならない関係の中で取り組む必要があります。そのためには、森先生が説く「謝恩と報恩」「人生の一回性」「立志」といったしっかりとした生きる軸、〝価値観〟を体得することが必要不可欠だという思いからです。

社員の反発があるかなと思いましたが、『修身教授録』などの輪読会をしながら、しっかり挨拶しよう、よい価値を生む言動に徹して自己を変革し、お客様に貢献しようなどと学んでいく中で、素直に受け入れてくれるようになりました。また、財務面だけではなく、トータルにお客様の悩みに寄り添えるようマーケティングなど経営面の勉強にも力を入れていきました。

すると、お客様から「御社は人が育っていますね」「若い社員でも経営者のような発想をしていますね」などと嬉しいお声をいただけるようになり、実際にお客様の企業も好業績になる事例が増えていきました。さらに「思想学習をうちの社員にもしてもらいたい」という要望も寄せられるようになったのです。

その嬉しい声に伴って、低迷していた当社の売り上げも八年間で約三倍になりました。もちろん税務などの知識も大切ですが、何よりも社員一人ひとりがしっかりとした生きる軸、価値観を身につけた人材に育つことこそ企業の長期的発展の源であることを私は思想学習の取り組みを通じて確信しております。

「修養の師」ともいうべき森先生とともに、「経営思想の師」として私淑してきた人物に経営学者のピーター・ドラッカーがいます。ドラッカーは「企業は社会のエンジン」だと言いました。企業が業績を上げることでGDPが増え、雇用が増え、よりよい社会が実現していくのです。

そのために、クボタで教えていただいた「自彊不息」という言葉のように、これからも先哲に学び、人を育て、お客様に寄り添い、よりよい社会の実現という終わりなき道を倦まず歩んでいきたい。それが受世の恩に報いる道だと思っております。

（おがさはら・しろう＝御堂筋税理士法人代表）

『修身教授録』に導かれて

小笠原士郎

私は昭和二十七年、大阪です し屋を営む両親の次男として生まれました。その当時、商売人の子供は幼い頃から店の手伝いをするのがごく当たり前で、私もまた皿洗いや注文聞き、中学生になってからは帳面つけなどを手伝う日々を過ごしました。

父は私が小学四年の時に不慮の事故で亡くなったため、母は一人で一家を背負い経営に奮闘していました。その姿を見て育った私は、いつしか「税理士になって経営を助けたい」との思いを抱くようになったのです。

お世辞にも、母は経営者として優れているとはいえませんでした。助けたくても助けられない、無力な子供の私が持っていた母への複雑な感情が「経営者を助けたい」という強い心のエネルギーとなったのでしょう。

大学卒後後は、縁あって久保田鉄工（現・クボタ）に入社しました。しかし税理士への思いは断ち難く、五年で退社。実家近くの「出口会計事務所」において経験を積ませていただき、税理士としての基礎を学ばせていただきました。

遠回りはしましたが、昭和五十九年に試験に合格することができ、私は念願の税理士としての歩み始めました。ただ、実務能力は評価されても、私にはどこか自分本位なところがあり、悩みを抱えたお客様に十分寄り添うことができず、厳しいお叱りをいただくこともありました。

出口会計事務所で税理士としての態度の反映であって、自分が変われば他人、組織が変わる、という考え方です。私は「統合思想」に触れ、「お客様や社員、家族に対してよい関係を築いていくためには、まず自分自身が変わることが必要なのだ」と、気づかされたのでした。

そして、さらに学びを深めようと、稲盛和夫氏が塾長を務めている「盛和塾」にも入塾。その勉強会のテキストとして使用されていた森信三先生の著書『修身教授録』と出逢ったことが、私のその後の人生を決定的に変えることになりました。

特に第九講「読書」を読んだ時の感激はいまなお忘れられません。「読書の人生に対する意義は、『心の食物』という言葉がもっとも当てはまる」などの森先生の教えが心にずしりと響き、頭を叩かれたような衝撃を受けたのです。また、森先生の師匠である西晋一郎先生の「人の一生は、恩の観点からいえば、ただ恩を受け、恩を返すだけである」という言葉にも震えるような感動を覚えました。

もともと儒教思想は好きではありましたが、それ以来、向学心が湧き上がり、森先生に導かれるようにして二宮尊徳や吉田松陰、西洋哲学などの思想書を貪るように読んでいきました。

その中で、『修身教授録』を主なテキストとして、私は社員たちに対して思想学習を始めることを決断しました。私たちの仕事は、一歩間違えばお客様の会社を倒産させてしまう可能性さえあるため、経営者の方との抜き差しならない関係の中で取り組む必要があります。そのためには、森先生が説く「謝恩と報恩」「人生の一回性」「立志」といったしっかりとした生きる軸、〝価値観〟を体得することが必要不可欠だという思いからです。

社員の反発があるかなと思いましたが、『修身教授録』などの輪読会をしながら、しっかり挨拶しよう、よい価値を生む言動に徹して自己を変革し、お客様に貢献しようなどと学んでいく中で、素直に受け入れてくれるようになりました。また、財務面だけではなく、トータルにお客様の悩みに寄り添えるようマーケティングなど経営面の勉強にも力を入れていきました。

すると、お客様から「御社は人が育っていますね」「若い社員でも経営者のような発想をしていますね」などと嬉しいお声をいただけるようになり、実際にお客様の企業も好業績になる事例が増えていきました。さらに「思想学習をうちの社員にもしてもらいたい」という要望も寄せられるようになったのです。

その嬉しい声に伴って、低迷していた当社の売り上げも八年間で約三倍になりました。もちろん税務などの知識も大切ですが、何よりも社員一人ひとりがしっかりとした生きる軸、価値観を身につけた人材に育つことこそ企業の長期的発展の源であることを私は思想学習の取り組みを通じて確信しております。

「修養の師」ともいうべき森先生とともに、「経営思想の師」として私淑してきた人物に経営学者のピーター・ドラッカーがいます。ドラッカーは「企業は社会のエンジン」だと言いました。企業が業績を上げることでGDPが増え、雇用が増え、よりよい社会が実現していくのです。

そのために、クボタで教えていただいた「自彊不息」という言葉のように、これからも先哲に学び、人を育て、お客様に寄り添い、よりよい社会の実現という終わりなき道を倦まず歩んでいきたい。それが受世の恩に報いる道だと思っております。

（おがさはら・しろう＝御堂筋税理士法人代表）

私を変えた恩師の言葉

土井ひかる

三輪光先生と初めて出会ったのは六年前の二月二十五日、私が高校一年生の頃に遡ります。兵庫県立飾磨工業高等学校の多部制柔道部監督として、当時、全国高等学校定時制通信制体育大会男子団体の部で二連覇中（現在、九連覇）だった三輪先生は、厳しい教育者として地元では名の知れた先生でした。

私は大人のことをあまり信用できないと思っていたこともあり、ごく普通の先生であれば、おそらく何を言われても聞く耳を持たなかったでしょう。ところが三輪先生の威圧感は独特で、なおかつ視線を逸らすことなく私の話をじっと聞いてくれたのです。この先生は何かが違う。これが三輪先生の第一印象でした。

男兄弟の真ん中に生まれた私は子供の頃から活発で、小学生から続けていた柔道は中学二年生で黒帯を取り、中学校のソフトボール部では一年生の時から試合に出るなど運動には自信がありました。ところが三年生にもなると、もう運動は散々したのだから高校では思い切り遊びたい、という気持ちが頭をもたげてきたのです。

勉強があまり得意ではなかったため、推薦で入れれば高校はどこでもよいとの安易な考えから、地元でもかなり荒れた公立学校に入学。中学三年生の頃から素行で何度か指導を受けていましたが、高校ではある事件をきっかけに中退することに。

そんな私を心配した両親が私のことを預けようとしたのが、三輪先生だったのです。男子生徒ばかりの工業高校、しかも一つ年下と同じ教室で学ぶことに抵抗を覚えましたが、強制的に入学が決められたのでした。

柔道部への入部も半ば強制的でしたが、もう柔道はやりたくないという私に対して、三輪先生からの助言でマネージャーとしてスタート。前の高校での生活習慣からなかなか抜け出せなかった私は、当初はついていくのがやっとという毎日でした。

三輪先生にはそれこそ日常の生活態度に関することからよく叱られましたが、叱った理由を説明してくれるとともに、よいところはよいと褒めてくれる姿勢に、先生への信頼は徐々に高まっていきました。

一方、マネージャーとして部員の保護者と関わる中で、文句を言われたり無視されたりと挫折感を味わうこともありました。「そこで逃げたらいけない。苦手な人ほど真正面から向き合え」と諭され、どんな時も笑顔と挨拶だけは忘れなかったことで折れない精神力を養えたのも、三輪先生のおかげでした。

また、部内には鑑別所から出てきたばかりの部員や内気で人とコミュニケーションを取るのが苦手な部員など様々です。そういった部員一人ひとりとどう向き合っていくか。そうしたこともまた、私にとって大きな学びとなりました。

生来の負けず嫌いもあって、柔道をもう一度やりたいという気持ちが抑えきれなくなったのは、一年生も終わり頃のことです。その旨を先生に伝えると、待ってましたと言わんばかりに